



Title	近代日本における「紐結」の受容と手工教育：女性文化の文脈を超えて
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	間谷論集. 2025, 19, p. 17-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

近代日本における「紐結」の受容と手工教育 ——女性文化の文脈を超えて——

矢島 由佳

〈キーワード〉 手工教育 紐結 女性文化 岡倉覚三 フレーベル

1. はじめに

手工教育とは、子どもを対象とした、物を製作する技能技術に関する教育であり、19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ、アメリカ、日本等で拡がった。日本の小学校教育における手工教育は、殖産興業政策の要請にも後押しされ、1886（明治19）年に随意科目という形で高等小学校に設置された¹。その後、日清戦争を契機とする近代産業の発展に伴い、1900年前後から手工科への関心が高まり、1926（大正15）年の小学校令改正により高等小学校で手工科が必須化されるに至った²。さらに、1930年代後半には尋常小学校においても盛んに実施され、1941年には尋常小学校段階に相当する国民学校初等科においても芸能科工作として手工科は必修科された³。本研究では、この手工教育の中で教材単元として構成された「細工」の一つである「紐結」に着目し、1900年代から1930年代にかけての導入背景と教授内容について主に教科書を中心とした一次資料を検討することを通じて、近代国家形成期において紐結に内在したジェンダー観の特質を明らかにすることを目的とする。

まず紐結という語の意味を確認しておく。『日本国語大辞典』（2001）および江戸時代の有職故実家・伊勢貞丈による『貞丈雑記』（著作年未詳）および『包結記』（成立年未詳）の記述を踏まえると⁴、紐結は花結びの別称として用いられてきた。この慣例を受け入れ、本研究では、内容に応じて、花結びという語を適宜

用いる。花結びは、長緒結とも称される紐結びで、茶道や香道の系譜に位置付けられた伝統文化の一つとして認識されている。この花結びが、女子の手さみや平安時代の高貴な女性の教養の一つであったという言説は、『源平盛衰記』(作者、成立年代未詳) を典拠に、江戸時代から現代に至るまで花結びに関する記述に確認されている。他方、従来の花結びの伝承に関する考察で看過されてきたのは、明治時代から昭和時代にかけて学校教育、特に手工教育、裁縫教育、礼法教育を通じて花結びが教授されてきたことである。以上を踏まえた本研究により、近代国家形成期において、殖産興業政策の影響下で、紐結が労働者育成を目的として手工教科で教授された実態が明らかになるとともに、いかに「女性文化」として伝承されてきたかの一端が明らかになることが期待される。なお、本稿の引用については、読みやすさを考慮し、適宜旧字体を現代語表記に改めたことをあらかじめ断っておく。

2. 手工教育にみる紐結に関する先行研究

最初に学校教育を通じた「花結び」の伝承に関する先行研究を確認していくたい。まず、おほつき四郎『伝承・花結び』(1981) があり、江戸時代から昭和にかけて刊行された6つの著作物を再編集した内容で構成されているが⁵、夫々の著書が著された背景についての言及はほとんどない。なお、本稿は、明治時代以降の手工教育にみる花結びの伝承に関する考察であるため、上記の6つの著作物の内、手工教育に関する教師向けの教本を複数著した、木内菊次郎により著された『実用はなむすび：附・うちひも』(1909) のみを考察対象とする。

本件の先行研究として、津田昇が上越教育大学大学院在籍時に著した⁶、論文『消えた教材「紐結」の考察』(1987) として挙げられる。同論文では、「手工教育の低学年教材は西洋模倣から始まったものであったが、その中にあって、明治37年『小学校教師用手工教科書』「紐結」(ひもむすび) は我が国独特のものである」、「日本の小学校における工作・工芸教育では次々に教材開発がなされ、過去に様々な教材が姿を消していったが、消えた教材の中には後の時代にも立派に通用するものもあるが、それらについての研究があまりなされていない」という旨が述べられている⁷。つまり、同論文は、日本独自の教材と解釈し得る過去の教

材に新しきを見出す、という視座のもとに書かれたものと解釈できる。その内容は、木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』(1909)、文部省編纂『小学校教師用手工教科書』(1904) 等、小学校教師を対象に書かれた教科書や理論書に言及し、伊勢貞丈『包結記』『結記』の検討と手工科の教科書の比較分析に多くの誌面を割く。多岐に亘る内容ではあるが、論拠については再検討が必要であると考える。

論拠が乏しい箇所の具体例を挙げると、「紐結」は、フレーベルの恩物⁸、その他のものとのつながりはみられず、むしろ室町・安土・江戸時代の「結びの文化」に関連したものであったと考えられる」と述べるが、その説明は省かれている⁹。また、紐結が、明治時代の国粹主義的、啓蒙機運の中で訓練主義的教材として生まれ、岡倉天心・フェロノサなどの「毛筆画運動」¹⁰の時代と並行していたということも指摘しているが、その説明はなされていない¹¹。さらに、『小学校教師用手工教育教科書』(1904) にて教材とされた紐結は、1941（昭和 16）年の教科書改正とともに消えたが、終戦まで学習院初等科等で子女教育として紐結が教授されていた、と主張する¹²。だが、『学習院百年史 第一編』(1981) には、学習院初等科が国定教科書を使用し始めた明治 37 年 9 月からの課程表に「手工」という科目があるものの、手工の科目の教科要旨として紐結についての記載はなく、実際に紐結が教授されていたかどうかは定かでない¹³。また、手工教育に関する考察では、小学校手工教育における教材としての紐結を分析対象としたためか、教師用の教科書や理論書を中心とした分析内容に終始し、実際に尋常・高等小学校で使用された手工科の教科書の内容分析を行っていない。つまり、たしかに教師用教科書に紐結が教科として含まれているにしても、小学校の教科書に単元がなければ教える機会はなかったはずなのでは、という疑問点が看過されている。加えて、津田の論文解釈で特徴的なことは、「紐結が女子教育に適している」という解釈が繰り返される点である¹⁴。だが、紐結の教授に男性がどのように関与したのかという考察は十分に行われていない。以上のように先行研究には再検討の余地がある。このことを踏まえて、以下では紐結が手工科の教科に導入された要因およびいかに教授されていたのかを検討していく。

3. 紐結と自国文化の尊重

手工教育の教育目標は、「小学校教則大綱」1891（明治24）に見ることができ、勤労を好む習慣の養成、職業的能力の附与、感覚の訓練が目標とされ、有用性を重視した教科であったことがわかる¹⁵。他方、紐結およびその素材である紐は概ね明治初期より日本に固有の文化であると論じられ、そこには次第に岡倉覚三（1863-1913）等の主導者によって国粹主義と結びつけられるに至ったという側面が見られた。

では、その内実はいかなるものであったのだろうか。木内菊次郎は、教師向けに記した『実用はなむすび：附・うちひも』（1909）において、紐結は花結びといい、『源平盛衰記』にみられる平清盛の娘が花結びを嗜んでいたことから、和歌、習字、作文、音楽、図画と並んで紐結が上流の婦人令嬢が心得ておくものであった、と説明する¹⁶。それに続いて、江戸時代に伊勢貞丈が『包結記』を著したことで、後世に紐結が伝わった後、明治維新の際に、一時諸芸事が廃れ、結方も廃れ、糸商の店頭に僅か二三種の結方を見るに過ぎなくなつたが、明治の小学校の手工科に紐結が加えられ、再度世に現れることになった、と記す¹⁷。ここでいう明治において諸芸事が一時廃れたという記述に関連して、啓蒙思想家および教育家と知られる福澤諭吉（1835-1901）は『帝室論』（1882）において、「書画、彫刻、剣槍術、馬術、弓術、柔術、相撲、水泳、諸礼式、音楽、能楽、囲碁将棋、挿し花、茶の湯、薰香、大工左官の術、盆栽植木屋の術、料理割烹の術、蒔絵塗物の術、織物染物の術、陶器銅器の術、刀剣鍛冶の術」を日本固有の諸芸諸術として列挙し、それらを保護する必要性を述べ、帝室が学術および技芸の奨励にかかわるべきだと述べ、明治維新後の諸芸事の衰勢の様が窺える¹⁸。

このような潮流のもと、美術家や工芸家の保護奨励をするために、帝室、すなわち今日の皇室の御用を務める、という一種の名誉職であった帝室技芸員制度は、日本美術協会による宮内庁への上申を経て1890（明治23）年に始まった¹⁹。そして、自国文化を尊重しようという機運は、日本美術協会と対抗関係にあった美術学校派を率いた岡倉覚三の言説にも見られた。岡倉は周知のとおり、東京芸術大学の前身である東京美術学校を1889（明治22）年に創設した人物である。開校された東京美術学校には、絵画科、彫刻科、美術工芸科が設置された。ま

た、1890（明治23）年「第三回内国勧業博覧会審査報告」にて、岡倉は1890（明治23）年は、節目の年であり、自國美術の特性を知り、その上で西洋美術の良さを取り入れて日本の美術を創成していく時期である、と説いている²⁰。岡倉の思想は、明治中期に起こったこのような国粹主義思想の文脈で理解でき、服飾史家の岩崎雅美による研究が明らかにしたように、それは東京美術学校の制服にも反映されていた。この制服は、岡倉が東京美術学校の存在を世に知れ渡ることを念頭において国文学者の黒川真頼に依頼した

もので、留め具として釦迦結びを伴っていた。それは、国粹保存の主義を考慮して興福寺にある野見宿禰當麻蹴速の画像、すなわち古典に基づいて黒川が考案した案を岡倉が採用したものであった²¹。その制服の実態は、1899（明治22）年の雑誌『風俗画報』第4号掲載の「職員及び教員」と「生徒」の制服（図1）に見ることができる²²。

この記事には、「職員及教員は服の色葡萄色にして地は綾織羅紗生徒は海藻色みして無地羅紗なり」と制服の色について言及した上で、その制服は奈良朝前後の制服に基づいてつくられ、そこに国粹をみることができる、と説明が付されている²³。この風変わりな服装は人目を引いたものの、好意的に受け取られた記録はほとんど残っていない。1898（明治31）年に岡倉が東京美術学校校長を辞職する少し前の1896（明治29）年に絵画科に西洋画科が加わったのを契機に、奈良朝の制服に馴染めない西洋画科の教師や生徒は、制服の代わりに、日陰葛を模



図1：東京美術学校「職員及び教員」と「生徒」の制服『風俗画報』第4号（東陽堂、1889年5月10日）10頁

した、蟠結びの紐がともなった七宝焼きで丸に美の徽章を襟元につけるようになった様も岩崎が明らかにしている²⁴。以上のように、自國文化を尊重した岡倉が率いる東京美術学校の制服や制服の代わりの徽章に紐結びが用いられていたことがここで確認できたといえよう。

次に本論との関係で特筆すべきは、岡倉が1899（明治22）年の東京美術学校の創立に際して、日本の伝承工芸である「ひも」が他の美術工芸の分野と関係が深いことから、紐科を設けようとしたことであった²⁵。その際、岡倉は、有職組紐道明の5代目道明新兵衛に教壇に立つことを勧めたが、同氏が固辞したため、紐科の設立は実現しなかった²⁶。紐科が実現していれば、5代目道明新兵衛が息子と共に取り組んでいた、甲冑、刀剣等の付属組紐、神社仏閣の經典や絵巻手管の紐、有職故実関係の紐等に関する修理や復元、新たな組紐創作に関する内容が教授されたもの、と推しあはれる²⁷。年紀は明らかでないが、上野にある有職組紐道明に1945年の関東大空襲後に7代目道明新兵衛によって作られたと考えられる紐結見本（図2）が飾られていることに鑑みると、紐科が実現していれば、道明家を中心に、組紐製作に加えて紐結びの技能やその文化史が現在より盛んに研究されていたと推しあはることができる。このように、岡倉は、自國文化を重用し、紐に価値を見出している。それは、国粹主義が興隆した時勢によるものだけでなく、紐が工芸品と深く結びついていたことに起因すると解釈できる。



図2：道明新兵衛製作の紐結見本、有職組紐道明所蔵、2023年4月29日筆者撮影

4. 手工教育の展開と国定教科書の受容

紐結を包含する手工教育は、明治期の殖産興業政策の影響を受け、小学校教育において児童の技能育成と勤労精神の涵養を目的として推進された。1903（明治36）年に小学校令が改正され、翌年4月から国定教科書制度が開始されたこと

は、手工教育の発展における重要な転換点であった。なぜなら、国定教科書制度の開始により、知識を得るという点に関して国民が国家の関与を引き受けざるを得なくなり²⁸、国家の意向に沿った知識が拡まっていった側面があるためである。それを踏まえて、以下では、手工教育の展開に着眼し、紐結に関する記載を含む国定教科書について考察していく。

日本初の小学校手工教科書『小学校用手工篇』が1887（明治20）年に刊行され、1888-1889（明治21-22）年から石川県で手工科の授業が実験的に実施された²⁹。その後、1890（明治23）年には尋常小学校に「手工」が加設され、翌1891（明治24）年には高等小学校でも随意科目として採用されたが、1892（明治25）年頃には次第に実施が減少したという³⁰。美術教育学者の山形寛（1888-1972）によると、このようにその展開が芳しくなかった手工教育は、明治30年代後半に刊行された『小学校教師用手工教科書』によって、方向性が明確化されたため、持ち直していった³¹。尋常小学校での手工科の加設は、1905（明治38）年頃から1910（明治43）まで急増したものの、1911（明治44）の小学校令改正によつて減少に転じた³²。さらに、1914（大正3）年には手工科の必須化を求める内容を含んだ法令改正の建議がなされたが、状況の好転には至らなかつた³³。少し時代は下るが、当時の手工教育の普及状況について、大阪府天王寺師範学校の教諭であった佐藤左は、『師範学校小学校用手工科教材の説明』（1923）で次のように述べている。

我が手工科の現状を観るに一般に、都会の学校では立派に手工科が設置されてゐるが、地方に至つては非常に少ない—と云ふのは相当設備に費用がかゝると云う点からであらう³⁴。

この記述から、手工教育は都会を中心に実施され、全国的な普及には至っていないかったと推しあはれる。その後、1926（大正15）年の小学校令改正で、初めて手工科は高等小学校の必修教科となつた³⁵。ただし、手工科の教科書はこの制度の対象外であり、生徒用の国定教科書は一度も編纂されなかつた³⁶。そのため、生徒用の国定教科書を用いる代わりに、文部省が著作権を持つ教師用教科書や、

文部大臣が検定した教科書が使用され、府県知事が教科書を採定する仕組みが取られていた³⁷。つまり、手工科が教科として存在した1886（明治19）年から1941（昭和16）年まで55年間にわたり、教師は文部省編纂の『小学校教師用手工教科書』（甲・乙・丙・丁の全4巻）（1904）を基に授業を進めていた³⁸。

したがって、手工科の教育内容を知る手掛かりとなるのは、圧倒的発行部数を誇る文部省編纂『小学校教師用手工教科書』（甲・乙・丙・丁全4巻）（1904）の内容による。1904年から1917年に亘り、毎年発行され、98,200冊が発行されている³⁹。これらの教科書の執筆を担当したのは、上原六四郎（1848-1913）と岡山秀吉（1865-1933）である。上原は、フランス語に堪能であり、フランス、ベルギー、スウェーデン、ドイツの手工教育に詳しい⁴⁰。岡山は、上原が文部省東京職工学校で教えていた1883（明治16）年に、同校に入学して上原に師事し、手工教育を学んでいる⁴¹。1901（明治34）年には、上原と岡山に『小学校教師用手工教科書』の編纂が文部省より委嘱され、この教科書には紐結に関する内容も記載されており、1941（昭和16）年の教科書改正で紐結教科が廃止されるまで改訂されることはないかった⁴²。その後、1941年の国民学校令を境に高等小学校の手工科は必須科目となり、手工から「芸能工作」と改称され、技術的側面が強調された科目へと変遷していった⁴³。

5. 手工教育における紐結の教育的意義とフレーベル思想の影響

手工教育の教育目的は、職業教育と普通教育を折衷したものであり、その中で「紐結」が採用された理由は、日常生活における実用性と教育的価値の両面にあり、児童の創造力や美意識を育てる教材として適していたためであった。

まず、手工教授の目的については、『小学校教師用手工教科書』（甲）（1904）の凡例に次のように記されている。

手工教授の目的 手工教授は眼及び手指を鍛磨し簡易なる物品を正確に製作するの技能を得しめ、工具の構造及び使用、材料の品類及び性質に関して日用普通の知識を授け、更に図画、理科、数学等に関する事項を実地製作の上に応用して工夫創造等の能力を増進し、且審美の情及び実業愛好の念を滋養

し、兼ねて綿密、注意、秩序、整頓、節約、利用、忍耐、自治等の習慣を得しむるを以て目的とす⁴⁴。

その内容から、手工教育は眼や手指を訓練して物品を正確に製作する育成を目的とし、まず図学等実用的な学習内容が重視され、その上で審美や実業愛好の滋養を目指したことがわかる。要するに、職業教育の目的と普通教育の折衷した内容が教育目標として掲げられている。その背景には、『小学校教師用手工教科書』が出版された1904年は、国家財政の逼迫に加えて、日清・日露戦争の影響により、近代的な産業が発展した時期であり、農業国から工業国への変容が求められていた、という社会からの要請と関係していると考えられる⁴⁵。

では、紐結はこの手工教育においてどのように位置付けられていたのであろうか。『小学校教師用手工教科書』(甲) (1904) には、その教育効果について以下のように記載されている。

この細工は錯雜せる紐結の條理を見分くことによりて理解及び工夫の力を養成し、又その結方を反復練習することによりて手指の熟練を計り、裝飾上の結方及びその応用によりて美の觀念を養成し、又日用に応ずる諸種の結方によりて日用の便利を興ふるの利益あるものなり⁴⁶。

つまり、複雑な紐結を試行錯誤しながら反復練習することで、理解力、手指の熟練、美的感覚を養い、日常生活で役立つ実用的技能を育てることができるというのである。この教育観は、先述の木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』(1909)にもみることができ、次のように述べられている。

此細工に於ては紐、水引、縄などで結ぶ種々な結方を教へて手と眼とを練習すると共に日常の便宜を得さすことも出来ます又裝飾的の結方の優美高尚なものを教ふることによりて自から美的感情を養ふことが出来ます⁴⁷

他方、『小学校教師用手工教科書』(甲) (1904) にみる「眼及び手指を鍛磨する」という手工教育の目的に鑑みて紐結を捉えると、19世紀に世界で最初に幼稚園を開設したドイツの教育学者フレーベル・フリードリッヒ (Friedrich Wilhelm August Fröbel) (1782-1852) の生み出した、子どもに触覚的経験を育ませることを目的とした知育玩具、「恩物」を想起し得る⁴⁸。そこで、先述の津田が指摘したように、フレーベルの恩物に紐結との関わりが見出せるのか、改めて検討を試みたい。紐結と関連があるのは、第一恩物として知られる、球体に糸が巻かれた紐状の持ち手が伴う「毛糸の玉」だと考えられる（図3）。フレーベルによれば、第一恩物で遊ばせる効用は、紐でボールを引いたり、持ち上げたりすることで子どもが結合と分離の観念を学ぶことである⁴⁹。第一恩物に紐を結ぶという要素は見られないが、モノを結びつけるという結合と分離の観念は、紐結にみる観念との共通要素として理解し得る。フレーベルは、主著『人間の教育』(1826) で、内なるものの自由な表現を身につけることの重要性に加えて、芸術的感覚を少なくとも少年時代から育むべき意義とその重要性について述べている⁵⁰。

加えて、幼稚園教育においてもフレーベル流の教育は採用され、手工教育とも関係があるとされてきた。1876（明治9）年にお茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校に開園された附属幼稚園にて、関信三（1843-1880）を監事とし、ドイツ人クララ・チーテルマン（松野クララ）(1853-1931) を首席保母、豊田英雄（1845-1941）らを保母に据えて、上流階級の子女を対象に実施したフレーベル流の教育であり、それが後に初等教育における手工教育に発展し、工芸教育の基礎となったと考えられている⁵¹。

さらに、前述の上原の手工教育論は、フランス手工、スウェーデンのスロイド



図3：附属幼稚園旧蔵教育資料
「第一恩物 六球法」（大正～昭和初期）、お茶の水女子大学所蔵

手工を折衷したものであり、このスロイド手工の教育理念は、フレーベルの恩物に影響を受けている⁵²。このように、教育史および芸術的感覚を身につけることの重要性を主張したフレーベルの思想に鑑みれば、紐結が手工教育の教科に採用された背景にフレーベルの思想の影響があると考えられ、その包含関係は図4のように示し得る。

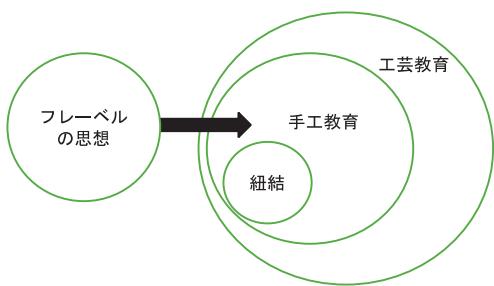


図4：「紐結、手工教育、フレーベルの思想、工芸教育」の包含関係（筆者作成）

6. 「紐結」の教授内容とジャンダー

手工科における「紐結」の教授内容は、『小学校教師用手工教科書』(1904)において体系化され、教師がその指導方法を習得し、児童に教授する仕組みが構築されていた。だが、紐結の教授は必ずしも容易ではなかった。

では、紐結の教授の内容とはどのようなものであったのだろうか。紐結の種類に着眼すると、『小学校教師用手工教科書』(甲) (1904) には、第2学年第2学期に9種類の紐結「こま結、片結、諸結、機糸結、継結、淡路結、総角結、鬼頭結、六曜結」、第2学年第3学期に5種類の紐結「叶結、蟠結、華鬘結、寶珠結、文簪結」、合計14種類の紐結が記されている⁵³。さらに、『小学校教師用手工教科書』(乙) には、第3学年1学期用に、9種「巾着紐結、眞寶珠結、垣根結、圓器の紐結、方器の紐結、長方器の紐結2種、蜻蛉結2種」、2学期用に10種類の紐結として、「梅花結、花結、菊花結、九曜結、蜻蛉頭結、飾総角結、蝶結、箆袋の紐結、笠袋の紐結、小兒拳結」、合計19種の紐結が記されている⁵⁴。また、結びの用途に着目すると、機織りに用いる「機糸結」、糸を継ぐための「継結」、羽織紐に用いる「片結、眞寶珠結」、茶道具を入れる箱に結ぶ「方器の紐結」、矢来を結ぶ「垣根結」、被布の紐の留めに用いる「九曜結、蜻蛉頭結、小兒拳結」という実用的な結びから、文簪に用いる結び、箆の紐飾りや茶道や香道で用いら

れてきた袋の口に結ぶ、長緒結びとしても知られる装飾的な結びまで多岐に渡り⁵⁵、手工教育の目的に沿い、生活に即した実用と装飾の双方の観点から結びが選択されていたことが窺える。結びの学習順序については、『小学校教師用手工教科書』(甲) (1904) の凡例に「・・細工の種類の難易に依りて順序を立て・・」と記載があるように⁵⁶、学年が上がるにつれてより煩雑な結びが学習対象となるよう、教科書が編纂されていた。

他方、個別の結びに関する記載内容に注目すると、結びの用途や簡単な図解と結び方の説明がある(図5)。例えば、代表的な結びの一つである総角結について、次のような説明がある。

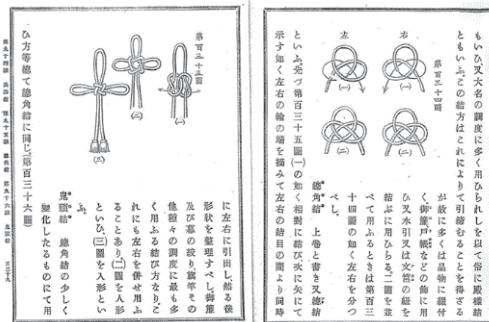


図5：「総角結」、『小学校教師用手工教科書』(甲) (1904) 138-139頁

総角結

上巻と書き又総結といふ。^{フサ}先づ第百三十五図(一)の如く相対に結び、次に矢にて示す如く左右の輪の端を摘みて左右の結目の間より同時に左右に引出し、然る後形状を整理すべし。御簾及び幕の絞り、旗竿その他種々の調度に最も多く用ふる結び方なり。これにも左右を併せ用ふることあり。(二)図を人形といひ、(三)図を入形といふ⁵⁷。

その内容は、結びの名称とその結び方の簡易な説明に加えて、結びの用途についても簡潔に述べられているというものである。この内容を以って教員が結びを習得することは決して容易ではなかったと想像でき、それを反映するかの如く、次のような紐結に関する教師向けの副読本が1910年頃に複数刊行されていた。

- ・西垣維新『手工手引草：国民教育 折紙 紐結』(1907) (図解本、解説本)
- ・木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』(1909)
- ・佐野正造『紐結図説（手工叢書）』(1910)⁵⁸

では、これら副読本の刊行意図とその内容はいかなるものであったのだろうか。まず、西垣維新『手工手引草：国民教育 折紙 紐結』(1907) は、図版本と解説本からなる全二冊の本であり⁵⁹、その出版意義は、次のように記されている。

…教員諸氏の専きたためにその実技の段に至っては既に十分の準備が整って居るとは言ひ難いそれで今日該科を研究せらるる方はその理論上の研究と同時に又実技の予習がなくてはならぬ何の学科と雖同じことながら技芸に関するものは殊に教師その人の実技の程度が大に教育の発展に影響するのであるそれ故私は今の急務として自らが浅識を不顧日頃聊か研究したところを諸君にお話しさせるのも敢えて無益とは思はない…⁶⁰

つまり、手工科の教授に関わる教員の準備が十分ではなく、特にその実技には練習が必要であり、その解説を行うことに意義があるということが述べられている。また、木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』(1909) では、その刊行目的が序文にて次のように述べられている。

…此頃小学校の手工科の中に此紐結の細工を加へられ各地の小学校は勿論男女師範学校に於いても旺んに教授せらるゝを見る然るに其むすびの名称の無稽杜撰のもの多く中には抱腹に堪えぬ名称を用ふるものさへありて同一の結方を教ふるに全国各地に於て其名称を異にするは不都合なれば一には結方の名称を訂し又一には同好の士に紹介して己れの誤れるを正さば遂には全く正しき名称を教ふることを得て結物教授の上にも多少の貢献あるべしと信ずるが故に多くの結方の中より取捨選択して小学校の教材として適當なるもの百余種を選びて載すこととしたり…⁶¹

ここでは、紐結が小学校教育を通じて国民に受容されていく中で、誤った知識も拡がり、著者が趣味をかねて集めた史料をもとに紐結に関して正しい知識編纂し、それを教授者に拡めるために同書が記されたことが記されている。他方、佐野正造『紐結図説（手工叢書）』（1910）には、その刊行目的は記されていない。

では、福読本では、紐結についてどのように説明され、『小学校教師用手工教科書』（1904）にみる紐結の説明とどのように異なっていたのであろうか。次に、「総角結」を取りあげ、『小学校教師用手工教科書』（1904）とその福読本の内容比較していく。西垣維新『手工手引草：国民教育 折紙 紐結 2』（1907）および『実用はなむすび：附・うちひも』（1909）のいずれも図解（図6、7）と併せて記述説明が確認できる。これら二冊の副読本における総角結に関する記述では、総角結の名称が古代の小児の髪の結い方に由来することが説明されている。また、総角結には「入字形」と「人字形」という2種類の結び目があることや、その用途についても詳細に記されている⁶²。この記載内容と『小学校教師用手工教科書』（甲）（1904）にみる「総角結」に関する説明内容（図4）を比較すると、総角結の用途について詳述されているほか、結びの由縁についての故実に基づいた説明が加わってことがわかる。他方、木内菊次郎『実用はなむすび』（1909）、

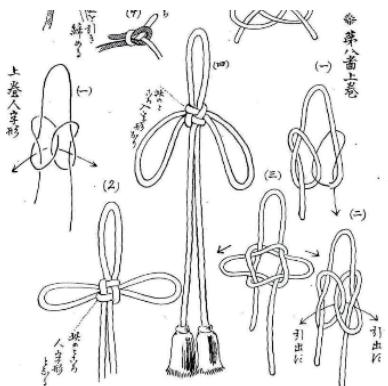


図6：「総角結」図説、西垣維新『手工手引草：国民教育 折紙 紐結 1』（1907）23頁

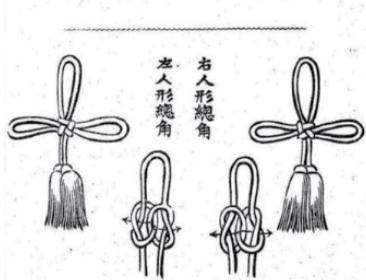


図7：「総角結」図説、木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』（1909）44頁

西垣維新『手工手引草：国民教育折紙 紐結』(図解版) (1907) の双方に総角結の図説(図6、図7)として、入字形と人字形の結び方の図説があるが、一本の紐の状態から順を追って完成形まで図説したものではない。つまり、同書を以てしても紐結を理解するのは容易ではなかったと推察できる。そのため、これら2つの副読本に加えて、学習院で教鞭をとっていた佐野正造が著した『紐結図説(手工叢書)』(1910)で⁶³、結び方の図説解説を中心とし、順を追った結び方の図説がある副読本も刊行されたと考える。以上に加えて副読本について特筆すべきは、「紐結びは女子教育に相応しい」と津田は主張したが、紐結教授のための副読本は、いずれも男性が記載しているという点である。

他方、『小学校教師用手工教科書』(1904)に記された学習対象者については、巻末附録の記載内容から全児童を複数の学級に編成する多級制の尋常小学校では、第4学年第1学期までは男女ともに手工科で同一内容を学んでいたことが記されており、同学年2学期以降は女子には切貫および縫取、男子には切貫厚紙が課され、同学年第3学期には、女子に縫い縫取のみを課して裁縫の準備とし、男子には切貫厚紙が課されていた。そして、紐結は尋常小学校第2学年、第3学年に配当されていたことが、課業配当表(図8)から読み取れる⁶⁴。

細工別		鋸型細工	金工	木工	竹細工	縫取	製本	厚紙細工	紐結	紙摺	切貫	折紙	粘土細工	豆細工	色板掛	
学年及学期																
尋常小学校	第1学年	1学期											10 (3)	12 (2)	10 (3)	
	2学期												10 (2)	10 (3)		
	3学期												10 (2)	8 (3)		
	第2学年	1学期											10 (3)	16 (1)	6 (2)	
	2学期												12 (1)			
	3学期													10 (1)		
	第3学年	1学期											15 (1)			
	2学期												10 (1)			
	3学期												8 (1)			
高等小学校	第4学年	1学期											18 (2)	14 (1)		
	2学期												10 (1)			
	3学期												8 (1)			
	第1学年	1学期											12 (3)			
	2学期												10 (2)		10 (1)	
	3学期												18			
	第2学年	1学期											12 (2)			
	2学期												9 (2)		10 (1)	
	3学期															
合計	第3学年	1学期														
	2学期															
	3学期															
	第4学年	1学期														
	2学期															
		3学期														
		合計	18	46	96	39	30	28	93	45	18	46	38	97	48	28

図8:「多級制尋常小学校第一学年及至高等小学校四学年 課業配当表」カッコ()内に記載の数字は各学期における指導の順次を示したものである。(『小学校教師用手工教科書』(丁)(1904) 235-236 頁をもとに筆者が作成)

その内容からは、津田の「紐結びが女子教育に適している」という主張と対照的に、男子児童にも手工教育において紐結が教授されていたことが明らかになったといえる。ただし、『小学校教師用手工教科書』(1904) と同年に刊行の手工科を教える教師用に教育学者の山下義正⁶⁵ が著した『小学校に於ける手工の実際』(1904) では、紐結について、次のような記述が確認できる。

紐結びは実用上裝飾用として用ひらるるものにして美感を養成するに適す然れども複雑困難なるが上に其種類甚だ多く記憶し難し（中略）紐結は最も女子に必要なり。（中略）女子には特に裁縫修練の任務あり為めに高等科に於ては之を課すべき時間なきを以て裁縫科と連絡して一週一時間位づつ手工を課せん事必要なり其教材は縫取、紐結、折紙、紙撲、切紙細工、厚紙細工、粘土細工中より選択すべし⁶⁶

ここでは、紐結は美感を養成するがその数が多すぎて記憶できない、という難しさが述べられるとともに、紐結が女子に相応しい教育であるということを小学校令施工規則改正の結果、手工科を教えることになった教師に説いている。つまり、『小学校教師用手工教科書』(1904) には紐結は女子に相応しいと記されていないが、同時期に刊行された手工科教授に関する解説本には紐結と女性を結びつける記述が確認でき、同主張は津田の論説の裏付けになるだけでなく、このような認識がある程度教師の間に共有されていた可能性を示すものだと解釈できる。

7. 手工科における紐結の教授実態

手工教育における「紐結」の受容について検討するにあたり、まずその教育環境を確認しておく。『小学校教師用手工教科書』(1904) が出版された明治後期には、尋常小学校の就学率が急速に向上していた。特に女子の就学率は、1897年（明治30年）に50.86%を超えた後、1904（明治37）年には91.46%に達し、男女合計の就学率も66.65%から94.43%へと大幅に上昇した⁶⁷。この高い義務教育の普及率は、尋常小学校で教授された教育内容が国民の共有知識の基盤となつたことを示している。そのため、紐結に関する知識も手工教育を通じて小学生

によって社会に広く受容された可能性がある。だが、前述のとおり、手工科は1926年（大正15年）まで必修科目ではなく、それ以前は、全ての学校で教授されていたわけではない。例えば、『新潮各科教授大集成』（1920）に掲載のある奈良女子高等師範学校附属小学校のカリキュラム、「手工教材の排列」には紐結は含まれていない⁶⁸。また、1926年の小学校令改正後、教員向け文部省夏期講習会で作成された手工科課程案の教材配当一覧にも、糸細工（編物、刺繡）や布細工（切付、袋物）は記載されているが、紐結に関する記載は見られない⁶⁹。これらの事実から、手工科が小学校教育において確固たる教科として確立していたわけではないことがわかる。

さらに、小学生向けの手工教科書の内容においても紐結の扱いは限定的であった。前述の通り、手工科は、教師用の教科書をもとに生徒に教授されてきた。小学生用の教科書が用いられるようになったのは、概ね1930年代以降であることが現存する教科書の調査から窺える⁷⁰。それら1930年代以降に刊行された教科書には、厚紙細工や粘土細工が多く含まれ、紐結は一部の教科書でわずかに触れられるに過ぎないことに特徴がある。例えば、石谷辰治郎『小学新手工尋常一年』（1931）は、紙細工と粘土細工を中心とした内容である⁷¹。石谷辰治郎『小学新手工尋常三年』（1931）は、紙細工が9割を占め、紙細工（包物）の項に水引の結び方が含まれるに留まる⁷²。同様に、石谷辰治郎『小学新手工尋常六年女子用』（1931）は布細工を中心に構成され、布糸細工の項で結びの一種ともいえるマクラメ編が見られるにすぎない⁷³。また、横井曹一『小学生ノ手工四学用』（1940）は、厚紙細工を中心に全て紙細工で構成されている⁷⁴。以上を踏まえると、小学生用の手工教科書が用いられるようになった1930年代以降、紐結は手工教育の主要な教材として広く採用されていたとは言い難いと考えられる。

8. おわりに

本研究は、紐結が日本の伝統文化である花結びの一形態として、女性の嗜みや貴族階級の教養として伝承されてきた歴史的背景を踏まえ、明治から昭和期にかけて手工教育において教授された紐結に着目した。そして、その教授内容と意義、時代背景および教育方針の変遷について考察した。その結果、明治期の殖産

興業政策や国粹主義的思想の高まりを背景に、手工教育の目標として「目と手の訓練」や「美的觀念の育成」が掲げられ、職業教育と普通教育の折衷を図る教育方針が打ち出される中で、紐結は教材として位置づけられていたことが明らかとなった。教授対象の紐結には、機織りなど実用に直結する結びや、茶道や香道に用いられる装飾的な結びが含まれており、これらは手工教育の目的である実用性と審美性を児童に身につけさせる、という目的を体現するものであったことは明らかだろう。だが、小学生用教科書の分析からは、時代が下るにつれて紐結の教授は見られなくなり、1930年代には紐結が小学生用手工教科書にほとんど含まれなくなったことも判明した。その背景には、1910年頃に複数の副読本が刊行されたことに鑑みると、教師が紐結の技能を習得することが容易でなかったことと関係していると考えられる。さらに、手工教育カリキュラムにおいて紐結は、尋常小学校第二学年および第三学年の男女を対象に共通の教材として教授されていたことも示され、津田の先行研究にみる「紐結は女子教育に適したもの」とする言説を超えた実態が明らかになった。加えて、紐結の教授に関する副読本や教材を記した著者がいずれも男性である点に着目し、紐結の教授に男性の関与があったこともわかった。ただし、『小学校教師用手工教科書』(1904)と同時期に刊行された手工科教授に関する解説本には紐結と女性を結びつける記述があり、紐結が女子教育に適したものという認識が当時手工科を教授した教員間で一定程度共有されていた可能性も確認された。さらに、岡倉覚三が東京美術学校に紐科の設置を試みた事例を通じて、紐そのものの価値づけにも権力を有した男性が積極的に関与していた点を確認した。以上の考察により、本研究は、従来「女性文化」の枠組みで捉えられることの多い紐結の伝承に、男性が重要な役割を果たしていたことを示し、近代日本の教育制度や殖産興業政策を通じて、伝統技能の継承と国民文化の統合に性別を超えた広範な参与があったことを明らかにした。

参考文献

- 1 宮崎擴道『創成期の手工教育実践史』(風間書房、2003) 36 頁.
平館善明『教材にみる岡山秀吉の手工科教育論の特質と意義：戦前日本の手工科教育論の到達水準の探究』(学文社、2016) 3 頁.
- 2 平館善明前掲書 3 頁, 91 頁.
- 3 平館善明前掲書 3 頁.
清原みさ子「幼稚園における手技と小学校低学年における手工科の教育内容の関連に関する研究」『愛知県立大学文学部紀要委員会 50 号』(愛知県立大学文学部、2001) 1-3 頁 (1-18 頁).
- 4 矢島由佳「江戸時代にみる花結びの伝承—ジェンダーの視点から」『デザイン理論』83 号 /2023 (意匠学会、2024) 49-63 頁.
- 5 おほつき四郎『伝承・花結び』(総合科学出版、1981).
- 6 津田のぼる氏のウェブサイト
<http://www.ystudio.jp/tsudanoboru/profile.htm> [2024 年 10 月 7 日閲覧]
- 7 津田昇「消えた教材『紐結』の考察」『美術教育学：美術科教育学会誌 9 卷』(美術教育学会、1987) 323 頁 (323-333 頁).
- 8 「フレーベルの恩物」とは、ドイツの教育学者フリードリヒ・フレーベル (1782-1852) が生み出した知育玩具のことである。その詳細は後述を参照されたい。
- 9 津田昇前掲論文 323 頁.
- 10 明治の美術界を率いた、思想家であり、教育家である、岡倉天心（覚三）およびフェロノサによる「毛筆画運動」とは、日本式毛筆画教育の方が洋風鉛筆画教育よりも日本の美術教育にはふさわしいと主張するものであった。国粹主義の台頭する中、1884 (明治 17) 年文部省に設置された図案調査会で、岡倉およびフェロノサの主張を受け入れ、洋風鉛筆画教育を日本式毛筆画教育に改められることになった『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第 1 卷』(ぎょうせい、1987) 53-54 頁)。
- 11 津田昇前掲論文 324 頁.
- 12 津田昇前掲論文 328 頁.
学習院初等科で紐結が行われていたことの典拠を津田氏に筆者がメールでお尋ねしたところ、「額田巖先生より当時の指導書を見せて頂いた。確かなことは額田氏の書籍および学習院から調べられる」という趣旨的回答を得た (2022 年 10 月 17 日付メール)。
- 13 『学習院百年史 第一編』(学習院アーカイブス、1981) 407 頁, 656 頁,
https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/pdf/hyakunenshi_no1.pdf [2024 年 1 月 7 日閲覧].
- 14 津田昇前掲論文 324 頁, 328 頁.
- 15 秋元幸茂「図画・工作教科書」『近代日本の教科書のあゆみ：明治期から現代まで』滋賀大学付属図書館編著 (サンライズ出版、2006) 76 頁 (72-79 頁).

- 16 木内菊次郎『実用はなむすび：附・うちひも』(実業之日本社、1909). 1-4 頁.
- 17 木内菊次郎前掲書 4-5 頁.
- 18 福澤諭吉『帝室論』(丸善、1882) 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション,
<https://iiif.lib.keio.ac.jp/FKZ/F7-A35/pdf/F7-A35.pdf> [2022年12月7日閲覧].
- 19 佐藤道信『<日本美術>誕生：近代日本の「ことば」と戦略』(講談社、1996) 66 頁.
樋口秀雄「帝室技芸員制度 - 帝室技芸員の設置とその選衡経過』『MUSEUM 202号』(東京国立博物館、1968) 29-32 頁.
- 20 岡倉天心「第三回内国勧業博覧会審査報告」『岡倉天心全集 第三巻』(平凡社、1979)
84-85 頁.
- 明治時代の近代国家としての日本が、自己に忠実であろうとし、西洋文化の中から必要とする要素のみを選択し、取り入れることについて、東洋文化の本能的な折衷主義として岡倉天心は1903年に刊行された英文著作『東洋の理想』においても好意的に評価している（岡倉覚三『新訳東洋の理想：岡倉天心の美術思想』古田亮（著・訳）、古田亮（訳注）、芹生春菜（訳注）（平凡社、2022）232頁）。
- 21 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一巻』東京芸術大学百年史刊行委員会編
(ぎょうせい、1987)139 頁.
- 岩崎雅美「近代にイメージされた奈良朝服飾—東京美術学校の制服・裁判所の法服・京都市美術工芸学校の制服・奈良女子高等師範学校教官の職服を例に—」『古代日本と東アジア世界』奈良女子大学 21世紀 COE プログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点編（奈良女子大学、2005）78-79 頁 (71-88 頁).
- 22 岩崎雅美前掲論文 74-76 頁.
- 23 『風俗画報』第 4 号（東陽堂、1889 年 5 月 10 日）9-10 頁. 岩崎雅美前掲論文 74-78 頁.
奈良朝の服飾に岡倉がこだわった理由は、「奈良美術研究の必要」であり、岡倉は、日本のすべての美術はすべて飛鳥奈良朝に導かれていると明言したほか、奈良を美術研究の重要な拠点と考えていた。それは、森有礼の欧化政策に沿った西欧的な制服案を一蹴するほどに強かったと解釈できるものである（岩崎雅美前掲論文 79 頁）。
- 24 岩崎雅美前掲論文 80-81 頁. 毎日新聞（横浜毎日新聞）記事 1896（明治 29 年）12 月 17 日 3 頁. 『国華』835 号（国華社、1961）477 頁. 横山大観『大観画談』(大日本雄弁会講談社、1951) 19-20 頁.
- 25 道明新兵衛『ひも』(學生社、1963) 53-54 頁.
- 26 道明新兵衛前掲書 54 頁.
- 27 『日本美術年鑑』昭和 38 年版（美術年鑑社、1964）142-143 頁.
- 28 山田恵吾編著『日本の教育文化史を学び：時代・生活・学校』(ミネルヴァ書房、2014) 101 頁.
- 29 木島温夫「手工・技術教科書」『近代日本の教科書のあゆみ：明治期から現代まで』滋

- 賀大学付属図書館編著（サンライズ出版、2006）96 頁（96-99 頁）.
- 30 木島温夫前掲書 97 頁.
- 31 山形寛『日本美術教育史』（黎明書房、1967）385 頁.
- 32 山形寛前掲書 390-391 頁.
- 33 山形寛前掲書 390-391 頁.
- 34 佐藤左『師範学校小学校用手工科教材の説明』（田中久栄堂、1923）5 頁.
- 35 山形寛前掲書 569 頁.
- 36 山形寛前掲書 393 頁.
- 37 山形寛前掲書 393 頁.
- 38 平野英史「昭和初期における小学校手工カリキュラムの展開：高等師範学校付属小学校の手工科教員による提案から」『美術教育学：美術科教育学会誌』37 卷（美術科教育学会、2016）361 頁（361-371 頁）.
- 39 坂口謙一「文部省編纂『小学校教師用手工教科書』における手工科教育実践観の転換」『産業教育学研究』第 24 卷第 1 号（日本産業教育学会、1994 年 1 月）36 頁.
- 40 宮崎擴道前掲書 41-50 頁.
- 41 平館善明前掲書 60-61 頁.
- 42 平館善明前掲書 91 頁.
平野英史前傾論文 361 頁.
- 43 秋元幸茂前掲書 78-79 頁. 山形寛前掲書 574 頁.
- 44 『小学校教師用手工教科書（甲）』文部省編，（大日本図書、1904）1 頁.
- 45 平館善明前掲書 91 頁.
宮坂元裕「初期手工教育の研究：手工教育が普通教育と職業教育の折衷として成立した経緯について」『美術科教育学 33 卷』（美術科教育学会、2012）411-421 頁.
- 46 『小学校教師用手工教科書（甲）』文部省編（大日本図書、1904）130-131 頁.
- 47 木内菊次郎前掲書 5 頁.
- 48 新留璃子「日本におけるフレーベル思想の浸透と芸術への影響：1910-20 年代の恩地考四郎の版画表現に着目して」『デザイン史学 第 20 号』（デザイン史学研究会、2023）15-17 頁（15-42 頁）。「恩物」は、ドイツ語で「Spielgabe」、「Gabe」、「Fröbelgaben」、英語で「Gifts」等と表記される。日本では、東京女子師範学校に開園された附属幼稚園の初代監事の関信三が著した『幼稚園記』で「恩物」と翻訳されて以来、その名が定着した（新留璃子前掲論文 40 頁）。
- 49 フレーベル『フレーベル全集 第四卷 幼稚園教育学』小原國芳監訳，莊司雅子監訳（玉川大学出版部、1982）63-64 頁.
- 50 新留璃子前掲論文、18-22 頁.
フレーベル『人間の教育（上）』荒井武訳（岩波書店、1990）71 頁，326-327 頁.

- 51 文部省編『学制百年史』帝国地方行政学会（1972）198-199頁。
宮坂元裕前掲論文420頁。宮崎擴道前掲書36-37頁。
- 52 宮崎擴道前掲書41-42頁。
- 53 『小学校教師用手工教科書（甲）』130-140頁，149-154頁。
- 54 『小学校教師用手工教科書（乙）』文部省編（大日本図書、1904）10-18頁，29-38頁。
- 55 小学校教師用手工教科書（甲）』130-140頁，149-154頁。
『小学校教師用手工教科書（乙）』10-18頁，29-38頁。
- 56 『小学校教師用手工教科書（甲）』3頁。
- 57 『小学校教師用手工教科書（甲）』138-139頁。
- 58 同書の広告は、1910年の朝日新聞に掲載されていたことからも手工科を教える教員の間に副読本を求める一定の需要があったことが窺える
（『朝日新聞』東京朝刊1910年5月10日、1頁）。
- 59 西垣維新『工手引草：国民教育 折紙 結紐』（1907）は結びを図解する『工手引草：国民教育 折紙 結紐1』、結びを解説する『工手引草：国民教育 折紙 結紐2』の二冊で構成される。数字番号は、国会図書館デジタルコレクションにより付されたものである。
- 60 西垣維新『工手引草：国民教育 折紙 結紐2』（目黒書店、1907）1-2頁。
- 61 木内菊次郎前掲書1-2頁（序）。
- 62 西垣維新前掲書42-43頁。木内菊次郎前掲書44頁。
- 63 佐野正造『紐結図説（手工叢書）』（良明堂、1910）21頁。
- 64 『小学校教師用手工教科書（乙）』235-236頁。
- 65 山下義正は、特に小学校教育における実科教育（実践的な科目）の推進に尽力し、棚橋源太郎の講義内容をもとに「尋常小学校に於ける実科初步教授法」を執筆し、同論考は、『鹿児島教育』106号、109号、110号に掲載されている（服部直樹、八田明夫「明治30年代の鹿児島における理科授業について一直観教授・郷土科に注目してー」『日本科学教育学会研究会研究報告24巻2号』（日本科学教育学会、2007）115頁（115-118頁））。
- 66 山下義正『小学校に於ける手工の実際』（郁文舎、1904）189-190頁。
- 67 文部省『日本の成長と教育』（帝国地方行政学会、1962）180頁。
- 68 『新潮各科教授大集成』近代学術研究会編（中興館書店、1920）960-963頁。
- 69 山形寛前掲書569-574頁。
- 70 教科書アーカイブについては、広島大学図書館デジタルアーカイブ、国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ、東書文庫を参照した。
- 71 石谷辰治郎『小学新手工尋常一年』（修文館、1931）広島大学図書館蔵。
- 72 石谷辰治郎前掲書2頁。

- 73 石谷辰治郎『小学新手工 尋常六年女子用』(修文館、1931) 広島大学図書館蔵 20-21 頁.
74 横井曹一『小学生/手工 四年用』(文祥堂、1940) 広島大学図書館蔵.

図2：道明新兵衛製作の紐結見本について有職組紐道明に問い合わせたところ、「現存する紐結見本は、8代目道明新兵衛製の時代に、当時伝わっていた道明新兵衛製作の紐結見本をもとに店で働く者が再製作したものである。オリジナルの紐見本は7代目道明新兵衛による可能性が高いと考えられる」ということが判明した。(2025年3月25日付Emailにて回答を得た)

謝辞

本稿の作成に際し、ご助言をくださった先生方にお礼申し上げます。

矢島由佳（大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程）

The reception of *Himomusubi* in Modern Japan —Handicraft Education Beyond Women's Culture—

YAJIMA Yoshika

Himomusubi [紐結] (knotting practice) has been incorporated into the procedure of nation building. This study examines the integration of *himomusubi*, a traditional Japanese cultural practice, into modern education during the Meiji through Showa periods. The research explores the socio-political and educational contexts that influenced its adoption in school curricula, particularly in handicrafts education.

Historically associated with women's refinement and aristocratic culture, *himomusubi* evolved as a teaching tool that allowed school pupils to develop practical skills and an appreciation for aesthetics. Under the Meiji government's Shokusan Kogyo policy [殖産興業政策], i.e., promotion of industrial development, *himomusubi* was incorporated into elementary handcraft education to cultivate both manual dexterity and artistic appreciation. Analysing early 20th-century school textbooks, the study reveals that *himomusubi* was taught to both boys and girls, which allows for the refutation of the pre-existing understanding that it was exclusively regarded as "women's culture." However, by the 1930s, its prominence in educational materials had declined, partly because it was challenging for teachers to prepare for *himomusubi* classes due to the need to learn various kinds of knots. This research also highlights the contributions of men to the dissemination and documentation of *himomusubi*, as evidenced by male authorship of school textbooks and supplementary manuals. This requires a revision that evaluated the previous interpretations of *himomusubi* as solely a female domain. These findings allow to reevaluate the role of *himomusubi* in embodying national identity and traditional craftsmanship in terms of Japan's modernization efforts, offering new insights into how traditional skills were preserved and adapted in the course of education and industrial policies.